

授業の具体的展開例

前時の学習から課題を持ち、主体的な学習へ

- T：昨日は、腕の関節調べをしましたね。どんなことがわかりましたか。
 C：思ったよりたくさんの関節がありました。
 C：特に手の部分にはたくさんの関節がありました。
 C：曲がる向きにもいろいろありました。ひじは決まった向きにしか曲がりませんでした。手首や肩はいろいろな向きに曲がりました。
 C：指の関節も曲がる向きが決まっていた。
 C：ひねったりできる関節もありました。
 T：それはどの部分ですか？
 C：手首です。
 T：はい、腕の関節調べでいろんなことがわかりましたが、「骨と関節」についてみんなは次にどんな学習がしたいですか。
 C：わたしは、足の関節が調べたいです。
 C：ぼくは、腕以外の体の関節について調べたいです。
 C：足はわかるけど、胴体に関節ってあるのかな？
 C：あると思うよ。曲げたりひねったりできるから。
 T：みんなの意見を聞いていると、体のほかの部分について疑問も出てきているようですし、調べてみたいようですね。では、今の意見を取り入れて、今日は「体のほかの部分の関節を調べる」ことをねらいにしようと思います。
 T：どんな風に調べますか。「腕の関節調べ」の学習をもとにして考えましょう。

—一人で考えた後、グループで話し合い—

- C：関節はどこにあるかを体を曲げながら確認したらいいと思います。ぼくがポーズをとるよ。
 C：昨日はそこにシールを貼ったけど、体には貼りにくいね。ワークシートに絵をかくて、関節の場所を書き込めばいいと思います。
 C：先生にデジカメで写真を撮ってもらって、その写真に書き込もうか。

—観察の視点を確認し、観察をする—

- T：それでは体の関節について調べましょう。

板書例

体のほかの部分の関節はどうなっているのか調べよう

[観察の仕方]

- ・ワークシートに曲がる様子を書き込む
- ・ほねのはたらきについて、気付いたことを書く。



「活用」の力を育てる評価の工夫

活用する力を育てる上でのポイント

- ◆ 学習したことを生かす場を児童にも意識させることにより、主体的に学ぶ姿勢が生まれる。学習に対して課題意識を持ち、主体的な学習のねらいを持つことが大切である。
- ◆ 前時の学習を振り返り、それにつながる学習を自ら課題として設定できるかどうかということがポイントとなる。単元のテーマに沿って教師が意図するねらいを持ちやすい場面であるので、このような機会を意識して活用したい。

「活用」の力を育てる評価の視点

まず、自分でねらいを考えられるかどうか为本時の学習を主体的に進められるかどうかの分かれ道である。前時までの学習を振り返り、関連付けながら、学習の流れに沿ったねらいを自ら考え、主体的に学習できる児童を育てていきたい。

そのための視点として、

- ① 前時までの学習を、学習記録を振り返りながら、もう一度自分の中で理解し直すことができるか。
 - ・腕の関節はたくさんある。
 - ・手のひらの関節には曲がる向きが決まっていると、複雑に曲がる場所がある。
- ② 前時の学習から、関連付けたり、視点を広げたりしながら課題意識を持ち、自ら学習のねらいを考えることができるか。
 - ・腕にもたくさん関節があったけれど、体の他の部分はどうなっているだろうか。調べてみたい。

児童のノート例

[今日のねらい]

体のほかの部分の関節はどうなっているのか調べる。

- ・うでの関節調べでは、たくさんの関節があることがわかった。
- ・曲がる向きが決まっていたり、手首のようにいろいろな向きに曲がる場所もあった。

[かんさつの仕方]

- ・うでのように決まった向きに曲がる関節やいろいろな向きに曲がる関節があるかどうか。
- ・ポーズをとりながらグループみんなでたしかめる。
(デジカメで写真を取り、写真に曲がる様子を書き込む)